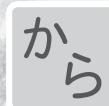


繰り返す日常を大切に思えたことはあるだろうか。明日も当然朝が来るものと考えてはいないだろうか。今回紹介する『つみきのいえ』は約12分の映像作品。決して長い映像ではない、その中にいくつもの「おわり」が垣間見える。

海面の上昇により水没しつつある街。次々に住民は去り、残った人々は浸水するたびに家を上へ上へと建て増しすることで耐えしのいでいた。次第に家の上に家が重なり、まるで「つみき」を積み上げたような形になってゆく。この「つみきのいえ」で主人公の老人は独り淡々と暮らしていた。



つみきのいえ



ある日、老人はお気に入りのパイプを海に沈んだ家の中に落としてしまう。パイプを拾いに海へ潜った彼を待つのは、かつて家族とともに暮らした家々。それを目の前にした老人の回想を通じてこの物語は進んでいく。深く潜るにつれて老人の記憶の奥底から溢れてくる思い出は、いわば老人の人生そのものだ。人生に向き合う老人を見ているうちに、自分は何か大切なことを忘れていないかと不安になる。

海にぼつんと浮かぶ「つみきのいえ」で暮らす独りの老人は、いずれこの街で淡々と「おわり」を迎える。人々が離れていって残された家々が、水没した階層での暮らしが終わったように。そうして長い時を経てこの街も終わることが強烈に印象づけられる。それでいて、優しい鉛筆のタッチとゆったりと流れる音楽は視聴者を決して絶望させない。大切なことを思い出せた老人の未来に希望すら抱かせる。この作品はいつかは終わる切なさを含みつつもどこか爽やかな余韻を残し、これから出会うすべてのことを大事にしまっておこう、と思わせてくれるのだ。

たしかに「おわり」を迎えたものは等しく忘れられていく。しかし、だからこそ尊いものとしていつまでも覚えていたいと思えるのではないだろうか。この作品を見れば、退屈だったはずの毎日がかけがえのないものに感じられるはずだ。

『つみきのいえ』

監督：加藤久仁生

価格：1,000円

(税込、9/1時点)

(Google Playなどで配信)

はみだし
すてーじ

10月は私の誕生日なので祝いなさい
⇒♪～(前奏) はつぴアツ

(工・2 J R中日本)
(続きは有料となります！；編)